

サウンドエデュケーション

金沢工業大学建築学部教授 土田義郎



サウンドスケープの思想の中には、「サウンドエデュケーション」(Sound Education)という教育的実践がある。これは、身近な音に耳を傾ける力を育むもので、知識の伝達よりも「聴く技術」を回復することを目的としている。我々の身を聞くことが、環境と自分自身を見つめ直すきっかけとなる。

サウンドスケープ(音的風景)という言葉は、近年少しずつ耳にするようになった。誤解されやすいのだが、それは単に音で空間を彩るという意味ではない。例えば、音を発するシステムを作るということは音環境の創造ではあるが、それだけがサウンドスケープではない。音を聴くように仕向けるだけのような柔らかな工夫もサウンドスケープのデザインといえる。音を通して環境をよりよい状態に保ち、私たち自身の感性を問い直すことがその考え方の本質である。

サウンドエデュケーションは、主体的に聴く活動である。サウンドエデュケーションは、主体的な参加を促す工夫や、個人差への配慮、天候・環境への注意が欠かせない。特に遊びの要素を取り入れることは、参加者の緊張をほぐし、積極的な関わりを生む上で効果的である。

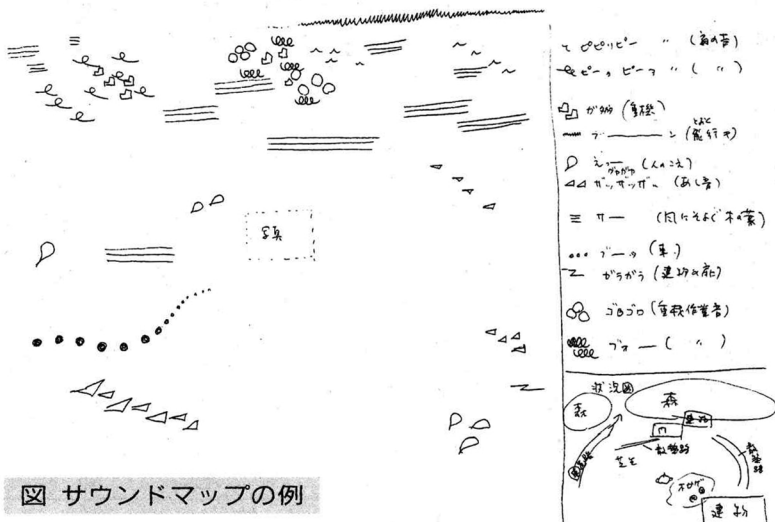


図 サウンドマップの例

サウンドスケープの思想の中には、「サウンドエデュケーション」(Sound Education)という教育的実践がある。これは、身近な音に耳を傾ける力を育むもので、知識の伝達よりも「聴く技術」を回復することを目的としている。我々の身を聞くことが、環境と自分自身を見つめ直すきっかけとなる。

サウンドエデュケーションは、主体的に聴く活動である。サウンドエデュケーションは、主体的な参加を促す工夫や、個人差への配慮、天候・環境への注意が欠かせない。特に遊びの要素を取り入れることは、参加者の緊張をほぐし、積極的な関わりを生む上で効果的である。

サウンドエデュケーションは、主体的に聴く活動である。サウンドエデュケーションは、主体的な参加を促す工夫や、個人差への配慮、天候・環境への注意が欠かせない。特に遊びの要素を取り入れることは、参加者の緊張をほぐし、積極的な関わりを生む上で効果的である。